

〔資料〕

東日本大震災被災地視察研修報告

Report on inspection tour of areas affected by the Great East Japan Earthquake

入江 誠剛
Seigou IRIE

安部 祐子
Yuko ABE

卜部 慈子
Itsuko URABE

岡村 恵
Megumi OKAMURA

黒野祐也
Yuya KURONO

小島章稔
Akitoshi KOJIMA

永松智也
Tomoya NAGAMATSU

山根あすか
Asuka YAMANE

福岡教育大学大学院 教育学研究科 教職実践専攻

(2020年1月31日受理)

学校運営リーダーコースⅢ期コース別科目「地域教育資源の開発ワークショップ」の発展学修として、2019年8月20日～22日の二泊三日で東日本大震災の被災地を視察した。

名取市閑上地区では、津波による街の壊滅的被害を目の当たりにした。「語り部」から震災当日の様子や家族を亡くした思いを拝聴し、教育長から学校再開までの経過についてお話を伺った。

仙台市教育委員会では、防災読本や震災遺構を活用した防災教育について詳しい説明を受けた。

石巻市では、多くの尊い命が失われた大川小学校跡を訪問し、南三陸町では、教師の判断により津波の被害を免れた戸倉小学校の避難場所を視察した。

女性職員が最期まで町民に避難を呼び掛けた南三陸町の防災対策庁舎跡周辺は整備が進み、新しい商店街が生まれていた。復興は、徐々に進みつつあるが、人々の心の傷は未だ癒えていない。

キーワード：自然災害、被災地、命、防災教育、学校、教員

1 はじめに

本視察の背景には、近年多発している自然災害の現状から、本科目の受講生であり、今後の学校運営を担っていくことが期待される学校運営リーダーコースの院生に、被災地の実相に直に触れることで、防災教育をはじめ、学校の危機管理に関わる知見と覚悟を身に付けて欲しいという指導教官の思いがあった。

それを実現に導いたのが、名取市教育委員会教育長瀧澤信雄氏をはじめ、今回お世話になった宮城県の皆様方である。

はじめに訪問した閑上小中学校では、震災当時の学校教育課長瀧澤氏から震災対応から学校再開までの経緯についてお話を伺った。

また、閑上中学校遺族会代表丹野祐子氏は、大切なお子様を亡くされたつらい思いとその体験を後世に伝えていかなければならないという強い決意を熱く語ってくださった。

仙台市教育局学校教育部教育指導課主任指導主事留守智信氏には、仙台版防災教育実践ガイドや震災遺構等を活用した防災教育の実践について貴重な御示唆をいただいた。

そして、仙台市立錦ヶ丘中学校長佐藤淳一氏には、多くの尊い命が失われた石巻市立大川小学校跡をはじめ、児童や教職員の命を守った南三陸町立戸倉小学校の避難場所、南三陸町防災庁舎跡などの案内役を務めていただいた。

また、二日目の宿では、震災時に石巻市立雄勝中学校長をお務めだった佐藤氏より、震災で生活が激変し心も傷ついた生徒への今も続く熱い思いを拝聴することができた。

夏季休業中とはいえ、会議や研修が予定されている中、快く院生を送り出していただいた所属校の校長先生方に心より感謝申し上げたい。

2 宮城県名取市（8月20日午後）

(1) 閑上小中学校訪問

平成30年4月に新設された、名取市唯一の義務

教育学校である関上小中学校を訪問した。名取市教育委員会より教育長瀧澤信雄氏、学校教育課長大友孝氏、学校教育課学務専門委員深澤祐司氏、関上小中学校校長八森伸氏、副校長門田氏が迎えてくださった。

そして、瀧澤氏より、「経験したことの無い未曾有の大災害だったので、どういう風に学校を再開するか手探りだった」という中での学校再開までの様子、義務教育学校関上小中学校開校までの経緯や現状について、ご講話いただいた。その後、校内を見て回った。

ア 震災当時から学校再開まで

海岸近くまでびっしり家が並んでいた港町の関上。ところが、津波でほとんどの家が流されてしまったという。

当時、学校教育課長を務めておられた瀧澤氏は、震災の2、3日後に関上に来たということだった。

「その時は、目を疑うような光景だった」とおっしゃっていた。船が何kmも内陸の道路に打ち上げられ、道路や田んぼが瓦礫で埋めつくされていた。

震災当日、中学校では卒業式だった。通常なら4時ごろまで学校にいる。「たればを言っても仕方がないが、卒業式でなければ・・・」と、無念の思いを口にされていた。

関上小学校は1.3mまで浸水し、1階は瓦礫や泥で埋め尽くされた。関上中学校も1.8mまで浸水し、どちらも学校として使える状況ではなかったという。

そこで、4月からどこでどのように授業を再開するかが問題になった。地域の方々からは、「学校はもう、無くなるのか」と不安の声が聞かれた。教育委員会は当初から「廃校にはしない。必ず再開する」と答えていたそうである。関上は地域の結びつきが強い地域で、以前から一貫教育をすべきだという声が地域から上がっていたことや、震災後の保護者アンケートで同じ場所での学校再開を望む声が高かったことなどもあり、学識経験者との検討などを経て、現地に校舎一体型の小中一貫校を再建する方針が決まったそうである。

(2) 関上地区の被災状況と現在 (NP0 法人「関上の記憶」丹野祐子さんの案内)

ア 関上プラザ

関上プラザからは、NP0 法人「関上の記憶」の丹野さん(関上中学校遺族会代表)に案内していただいた。丹野さんは、当時中学生だった息子さんを津波で亡くされている。丹野さんは、近くの公民館に逃げたことで助かったそうだ。

「あの時、『こっちに逃げなさい』と言っていた

ら・・・」「何もかも流されて、息子が生きていた証が何もなかった。こうして慰霊碑に名前を刻むことで、生きていた証を残したかった」と話された。写真も、形見になる持ち物も全てない。生き残った人たちの記憶の中にしか、生きていた証がない。どうしようもない悲しみがそこにはあった。

「この慰霊碑は、触れられるようにこの形にしました。たくさん触ってください」とのことだった。丹野さんは、愛しい我が子をかかわいがるようにやさしく名前を撫でておられた。私たちも慰霊碑に刻まれた14名の生徒の名前を撫でさせていただいた。どんなに怖かっただろうか。もし自分の学級の子どもだったらと、考えずにはいられなかった。

イ 名取市慰霊塔、遺構の広場、日和山

「津波なんか来ないって思っていました。人は、経験したことでしか、考えられないのです」と丹野さんはおっしゃっていた。「前も大したことなかったから大丈夫」と人は考えてしまうという。慰霊塔には、津波で亡くなった関上地区の方々の名前が刻まれていた。丹野さんの息子さんの名前もあった。しかし、事実を受け止めきれず、名前を刻むことができない方もいるという。終始明るい声で、時には楽しそうに懐かしそうに息子さんの小学生時代の歩道橋にまつわるエピソードを話された。まるで今も生きているかのようで、それが余計に苦しかったのと同時に、伝えなければならないという強い意思を感じずにはいられなかった。

ウ NP0 法人「関上の記憶」

最後に、「関上の記憶」館内を案内していただいた。関上の記憶の方々(遺族の方々)の思いを伝える10分ほどの映像を観た後、館内を見て回った。そこには、旧関上中学校からそのまま運んできたロッカーや、学校にあった生徒たちの遺品などが展示してあった。少しでも何か残っていないかと探し回り集めた貴重な(大切な)品だ。

また、子どもの心のケアとして、子どもたちが津波のことを語りながらつくったジオラマも展示してあった。それらは、凄惨な状況を物語っていた。丹野さんは、

「初めはこんな風に語れなかった。」とおっしゃっていた。それでも、伝えようとしている思いの強さを感じる場所であった。

3 宮城県仙台市(8月20日午後, 21日午前)

(1) 震災遺構仙台市立荒浜小学校

視察当日は研修行程の都合上、開館している時間帯に訪れることができなかった。事前に調べて

きた資料を見ながら、門の外から外観の観察になった。学校の周りは平地で、東側には海が見えていた。自分が当時この荒浜小学校に勤めていたら「教師としてどのように行動できたのか」を自ずと考えさせられる場所だった。

ア 当時の状況

ここ荒浜小学校は、震災当時児童や教職員、住民ら 320 人が避難した場所である。津波は 2 階まで押し寄せたが、全員が屋上に避難できたため犠牲者はでなかった。

しかし、荒浜地区全体では津波による甚大な被害が出たため、荒浜小学校も震災遺構として残すかどうか賛否が分かれたようだ。

仙台市震災時に荒浜地区に住んでいた 626 世帯にアンケートを実施し、38.2%にあたる 239 人から回答を得た。荒浜小学校の保存は 71.5%が賛成、21.3%が意見なし、7.1%が反対と回答した。その結果、津波の脅威や教訓を後世に伝えるため、震災遺構として整備された。

イ 教員のための手引き

宮城教育大学教職大学院の授業科目「学校教育・教職研究 B」の学修を経て教員のためにつくられた震災遺構を通じた「いのち」と「くらし」の学びの手引きであり、震災遺構である荒浜小学校の紹介だけでなく、それらを各教科と関連させた年間指導計画や行事と連携した防災教育活動計画の活用プランが紹介されている。

(2) 仙台市教育委員会

仙台市教育局学校教育部教育指導課主任指導主事留守智信様に、仙台市で行われている防災教育について説明をしていただいた。その留守様御自身も震災当時の被災者であり、当時の経験を基につくられた仙台市の防災教育についての思いが伝わってきた。私はその場で

「8 年以上の月日が流れた今、子どもたちに当時の思いが伝わりにくくなっているのではないか。防災に対する強い思いが風化していく心配はないのか。」という質問を投げかけた。

するとその疑問に対して

「震災被害者の中でも温度差がある。防災教育を行う上で、個人差はあって当然だと思っている。」という答えが返ってきた。私は「正にその通りだ」と感じた。防災教育とは以前の震災に対する思いをもたせるものではなく、その経験からいかに未来への備えをもたせるものだからだ。私はその答えが強く印象に残っている。

ア 防災教育の指針「仙台版防災教育実践ガイド」ができるまで

仙台市教育委員会では、各学校が仙台版防災教育の趣旨を踏まえながら各校の実態に合った防災教育に取り組むことができるよう、「仙台版防災教育実践ガイド」を各校に配布している。仙台版防災教育実践ガイドは Web 上で公開されている。

イ 仙台版防災教育で目指す児童生徒の姿

仙台市は「心豊かでたくましい子どもを育てる」教育を目指しており、そのために「豊かな心の教育」「確かな学力の育成」「健やかな体の育成」と並んで「防災対応力の育成」に力を入れている。

児童生徒に身に付けさせる防災対応力は、平常時における「防災」と、災害時における「災害対応」の双方の力を意味するものである。

また、仙台市防災教育で目指す児童の姿として自助と共助を挙げている。自助とは「平常時から災害に備え、災害時に冷静に判断し、自らの命を守り、臨機応変に自らの安全を確保できる力」とされている。共助とは「平常時から進んで他の人や地域の力となり、災害時の対応や地域に協力し参画できる力」とされている。

ウ 仙台版防災教育の全体像

仙台市では、防災教育を通じて育成を目指す資質・能力を「知識及び技能の習得」「思考力、判断力、表現力等の育成」「学びに向かう力、人間性等の涵養」の三本柱で整理し、それらがバランスよく実現できるよう計画されている。そして、それらは防災教育という特設の時間を設定するのではなく、学校教育全体を通じて育成されていくよう、各学校で計画されている。

「知識及び技能の習得」は、災害の種類や特徴、発生メカニズムや被害についての知識など、防災や災害に関する周知的・基礎的な内容である。

「思考力、判断力、表現力等の育成」は、危険の予測や安全のための判断など、防災や災害に関する直接的な内容である。

「学びに向かう力、人間性等の涵養」は、強い心と冷静な行動、他者との関わり等防災や災害に関する間接的な内容である。これら 3 つの力は、新学習指導要領の改訂により、改めて制定されている。

エ 防災教育で地域との関係づくり

仙台市では、防災教育の一環として地域と学校が共同で行う防災訓練や防災会議などが行われている。そのことで教員や児童生徒が地域と顔の見える関係になり、社会に開かれた教育課程や地域の活性化にもつながる活動になっている。

また、そのことで地域と学校の防災対応力も向上するなど、よい循環ができつつある。

4 宮城県石巻市（8月21日午後）

石巻市の視察は、仙台市立錦ヶ丘中学校校長佐藤淳一氏による案内で行われた。

これまで、福岡に講演会で来ていただいた折に、佐藤氏から震災当時の話を聞くことができたが、「何より一度は東北へ足を運び、肌で感じてほしい。」と話されていた。今回、私たちの東北視察の知らせを佐藤氏に連絡するや否や、真っ先に案内役を御快諾いただき、石巻市の震災当時の話を伺いながらの震災遺構視察が実現した。

【佐藤淳一氏の紹介】

平成23年3月11日当時、石巻市立雄勝中学校校長。卒業式を終えたばかりの午後に東日本大震災が発生した。そこから、教職員・地域の方々・生徒・保護者と共に安否確認と復興に向けた歩みが始まる。佐藤氏は、「子ども達のためにできることは全てやる。」という方針のもと、仙台市教育委員会学校教育部参事となっても、雄勝中新入生制服支援基金への寄付となる著書の執筆や全国への講演会を精力的に行ってきた。

平成31年4月からは、仙台市立錦ヶ丘中学校長に就任されている。

(1) 震災前の石巻市

平成17（2005）年4月に、石巻市・河北町・雄勝町・河南町・桃生町・牡鹿町の1市4町が合併し、現在の石巻市が誕生した。岩手県から流れる北上川が二手に分かれ、追波湾につながる川を北上川、仙台湾につながる川を旧北上川と呼んでいる。

石巻市の東部と牡鹿半島は、リアス式海岸となっており、新鮮な魚介類・沖合・遠洋漁業の成果が水揚げされていた。旧北上川河口を挟んで西に工業港があり、製紙工場などの工場があった。

(2) 東日本大震災の被害状況

石巻市は、宮城県下では最大の人的被害を出したところである。沿岸部・河川沿いの地区は津波の直撃を受け、大きな被害を受けた。文化センターや市立病院なども使用不能となり、入院患者はヘリコプターにより別の病院に搬送された。

また、旧北上川沿いは、川から津波が押し寄せて浸水したが、内陸部も排水路等を逆流した津波により浸水することとなった。

浸水面積は、市面積の13%（73㌔）にも及んだ。家屋被害も、全壊18,560棟、半壊2,663棟、一部損壊10,043棟にのぼり、災害がれきとして推計量629万1000tが処理された。

小中学校・高校65校中、大きな被害を受けたのは15校。他校を間借りするなどして授業を再開したが、平成28年度までの予定で複数校の統合や移

転等の計画が進められた。

(3) 雄勝地区震災遺構等視察

雄勝町は、石巻市の中でも、リアス式の三陸海岸に面した人口4,300人（震災前）の活気あふれる町であった。かつては十五浜村と呼ばれた優良な漁港は、日本有数のホタテ・ホヤ・カキの養殖やカツオ漁のえさとなるイワシの補給地として有名で、豊富な水産資源に恵まれている。

また、伊達藩御用達で600年の伝統を持つ「雄勝硯（すずり）」は、国内硯生産量の90%を占めていた。他にも国指定重要無形文化財の「雄勝法印神楽」や貴重な植栽で国指定天然記念物の「八景島」など、1つの町で3つの国指定文化財をもつ地域は、全国的にも大変珍しい。

平成23年3月11日に雄勝町を襲った津波は、約250名の命を奪い、町の9割もの建物を壊滅させた。

特に、雄勝病院は入院患者全員と職員の多くが、死亡・行方不明となった。

雄勝小学校の児童と教職員は、裏山からさらに高い所へ避難し無事だった。

雄勝中学校は卒業式を終え、卒業生を無事に送り出した後であった。学校は教職員のみで、卒業式の片付けを終えてひと段落したところに、すさまじい揺れを感じたと佐藤氏は語った。

以前から想定されていた宮城県沖地震が発生した場合、雄勝には十数分で津波が到達するという予測がされていたこともあり、日頃のシミュレーションの中で、生徒がいない場合は車で雄勝森林公園へ避難するとされていた。森林公園には、避難した地域の方々が次々に集まり、続々と避難してくる住民から「雄勝壊滅」という情報を受けた。

生徒の安否確認で公園がある山から下りることができたのは、3日目（3月13日）の朝からであった。教職員による避難所回りが続き、3月19日午後7時6分についに雄勝中学校生徒全員の無事が確認された。

家を失った約3,500名の住民に対して、市が町内に用意した仮設住宅はわずか500名分で、残りの3,000名は、町外に避難せざるを得なかった。

避難所からの仮設住宅移行が遅れ、町内最後の避難所が閉鎖されたのは9月末であった。

漁港が破壊され、漁師は船や網なども流出したことで、仕事を失った方も多い。沿岸部には、現在も防潮堤建設工事が続いており、海と町が分断されるように高い壁が連なり、平地からは全く海が見えない状況になっていた。

【新生 石巻市立雄勝小学校・中学校】

雄勝地区の中心部にあった旧雄勝小・中学校は、震災によりそれぞれ校舎が被災、約6年間約20キロ離れた内陸の仮設校舎で学んでいた。

半島部先端の高台にあった旧大須小・中学校の校舎は無事だったが、大須地区の人口流出が加速し、雄勝と大須の両地区ともに児童生徒数の回復が見込めないと判断され、平成29年4月に小中併設校として統合された。

新校舎は、雄勝湾を望む高台に建てられ、校庭から海岸へと降りていくこともできる。

また、新校舎横に『奇跡の桜』として移植されている桜の木がある。これは、旧雄勝中学校で津波に浸かってしまい、1本だけ生き残った桜の木である。現雄勝小・中学校の横江校長は、震災当時の雄勝中学校のPTA会長であり、この『奇跡の桜』の話を佐藤氏とともに語ってくださった。校舎も何もかも流された中で、この桜の木が1本だけ生きていることが分かった時に、驚きと喜び、そして「とにかく守りたい。」と思ったという。たくさんの支援を受けて、花を咲かせる元気を取り戻し、新生雄勝小・中学校に戻ってきたとのことだった。

真新しい体育館に、大きな雄勝太鼓と一緒に、廃タイヤにビニルテープを張った手作り太鼓があった。これは、大津波で何もかも流されてしまった子ども達が支援を受けるばかりでなく、お返しできる活動ができるようなものはないかと考えて始まった『復興輪太鼓』である。

当時雄勝中校長であった佐藤氏は「他力再生期」から「自力再生期」にしなければという思いから、「雄勝復興輪太鼓」と学力保障のためのサマースクール「たく塾」の2本柱で、教育再建に取り組んだ。

(4) 大川小学校跡視察

石巻市釜谷地区の北上川河口から約4kmの川沿いに位置する大川小学校は、東日本大震災で全校児童108人の7割に当たる74人が死亡、行方不明となった。

釜谷地区は、これまでに津波が到達した記録がなく、災害時の避難所は大川小学校と住民も認識していた。

また、山と堤防に遮られていて津波の動向が把握できない環境だったことも避難を遅らせた要因として挙げられている。

宮城県並びに石巻市も昭和三陸大津波レベルなら大川小学校には津波が来ないことを公言していた。震災前のハザードマップを見ても、この状況は予測していなかったことが分かる。

大川小学校は震災遺構として、現在も当時の状況を感じることができる状態で残されている。この地に立った時、言葉を失うほど、壮絶な思いがわき上がってきた。

震災前は、モダンな造りで新しい校舎であっただろうが、防災という視点から見た時に、建物は2階建てで屋上もなく、地域の避難所になり得る場所ではないと容易に想像できた。

それと同時に、震災時にこの裏山にすぐに逃げることができなかったのはなぜだろうという思いに駆られた。大川小学校後方には裏山があり、これまで授業でも登ったこともあったという。低学年の児童であっても、簡単に登れる場所であったが、震災時に裏山への避難が選択肢とじゃなかった。地震発生から津波到達までの50分間、校長不在で避難先の決定が遅れ、平地を移動するという避難経路を選択してしまった。列の後方にいた教諭と数人の児童は、向きを変えて裏山を駆け上がり、一部は助かった。

この日も裏山には、語り部の方と一緒に視察者が登っていた。震災当時の話は、今も語り部の方を通じて語られ、8年経った今も風化させないようにしている。

大川小学校の周りには、大川小学校の遺族会が、慰霊碑を建てたり、花を植えたりしながら守っていた。佐藤氏は、

「この場所に、ぜひ来てほしかった。話を聞くだけでは分からないものを、来て自分で感じてほしかった。教員ならば、この場所に一度は来るべき」と語られた。その言葉のとおり、校舎周辺を回りながら、当時の教職員の動揺や大津波を目にした児童の心境を想像すると、自分の心臓の音も高鳴り、涙がこみ上げてきた。震災遺構として残す意味を考えさせられた場所となった。

5 宮城県本吉郡南三陸町（8月22日午前）

南三陸町被害状況（町役場ホームページより）

- ① 津波の高さ 15.87m（OPINION3/11 日本財団助成事業）
- ② 人的被害 死者566人 行方不明者211人（南三陸警察署発表）
- ③ 建物被害 全壊3,143戸 半壊、大規模半壊178戸 半壊以上3,321戸

(1) 町防災対策庁舎跡**ア 町防災対策庁舎の被害**

町防災対策庁舎跡は、海岸から600mの地点で海が臨める場所にあり、また、近くに川が流れている。

当時は、防災庁舎跡周辺は平地であったため、津波が一気に押し寄せたであろうと思われる。

この防災対策庁舎は、1960年のチリ地震で起こった津波をもとに建てられた。海岸から約600m、地上から高さ約12mにある屋上は避難場所となっていた。約12mの高さがあれば、これまでの大地震での津波の大きさから考えても避難に十分だと思われていた。その防災対策庁舎をさらに2mも上回る津波が襲ってくるとは想像ができなかったはずである。

現在の防災対策庁舎跡周辺は、民家もほとんどなく、ダンプカーが往来し、ショベルカーにより川の堤防や土地も高く嵩上げされて工事現場の様相を呈している。復興に向けた工事が絶え間なく続いている。

イ 保存に向けて

防災庁舎跡は、保存か、解体かについて広く議論がなされてきた。その結果、劣化防止のための補修作業を行い、震災から20年後の2031年まで県が管理することになった。現在は、保存のための工事が進んでおり、防災対策庁舎跡周辺も嵩上げがなされ整備が進んでいる。

嵩上げた土地の高さは、防災庁舎跡と変わらないほどになっており、防災庁舎跡周辺だけが、その当時の高さのままになっている。いかに、大きな津波が来たのかを物語るようである。これだけの高さがなければ、あの大津波を防ぐことができないということなのか。この辺り一帯から海にかけて民家はなくなっており、あるのはこの防災庁舎跡と海の間に大きな道路が建設され、その道路から海側までも大きく嵩上げされて建設されている防潮堤だけである。町の様子が震災前とは大きく様変わりしている。民家がないということは人の生活がないことであり、建設中ということもあったのかもしれないが、何かもの悲しさを感じた。

ウ 復興に向けた取組

防災庁舎跡横の嵩上げされた所には「南三陸町さんさん商店街」が2012年2月25日に仮設商店街としてオープンした。商店街は「サンサンと輝く太陽のように、笑顔とパワーに満ちた南三陸の商店街にしたい」というコンセプトのもと、28店舗が並ぶ。

その後、2017年3月3日に、高台にある志津川地区に本設オープンした。このように商店街を開くことで町に活気が生まれ復興への機運の高まりにもつながるようだ。視察当日は、平日にもかかわらず、多くの人が訪れて賑わっていた。

(2) 戸倉小学校避難高台

戸倉小学校の被害状況

- ・3階建て校舎 屋上まですべて水没し、中の施設・設備・備品を含めて全壊
- ・体育館、プール、植栽など校舎外の全ての施設・設備も全壊
- ・児童の家庭 全壊戸数 家庭の8割(当時)
- ・教職員の家庭 住居全壊8名(当時)
- ・保護者の被害 父親死亡 1家庭
- ・児童の被害 死亡1名(当時2年 1名)
- ・教職員の被害 死亡1名

ア 宇津野高台

震災前の戸倉小学校は、南三陸町折立浜から約300m内陸の場所に建っていたが、現在は更地になっており、何も残っていない。あるのは、防潮堤と嵩上げた土地だけである。周辺には民家もない。

戸倉小学校の生徒と教職員が避難したという宇津野高台は、以前の戸倉小学校の北西400mほどのところにある。学校からは、やや距離があるだけでなく、急な坂道を登らないといけない高台である。実際に車で登ってみても、かなりきつい坂道であった。ここを小学生や就学前の園児が登ったのであるから避難にもかなり時間を要したと思われる。避難を指示した先生方も、津波がいつ襲ってくるともしれず、また、児童の避難なので思ったように進まず、気が気ではなかったのではないかと。

登ったところから海を眺めるとかなり遠くに感じるくらいの高さである。ここまで津波が押し寄せてきたとは想像もつかない。海までの距離と高さを考えれば、この高台にあれば大丈夫と考えるのが普通ではないかと思う。

海に近いということからいつ津波が来るかも分からない局面であり、さらには高台まで少し距離があることから、この場所まで避難してきたということは、素早い対応と決断が必要であったことが予想された。少しでも遅れれば、逃げる最中に津波に巻き込まれかねないからだ。

イ 高台から神社へ

しかし、実際は、高台も危険だということさらさらに上に小高い丘のようにになっている神社へと避難している。神社といっても狭い土地で社が一つあるだけである。上るにも参道の長い階段があるため、多数の小学生や就学前の児童を避難させるのは容易ではなかったはずである。

その後、この高台にも津波が押し寄せ、車や二階建てのアパートが流れて消え、避難してきた多くの住民が流され犠牲になっている。神社の周りは黒い津波の濁流であふれて渦を巻き、孤島のように

になっていたという。

佐藤淳一氏の話によれば、その当時の教務主任が語ったところによると、もし、この神社にも津波が押し寄せるようであれば、児童が流されないように木に括り付けようかとまで考えていたそうである。危機が目前に迫り、何とか児童を助けたいという必死の思いが表れた話である。

なぜ、戸倉小学校では、ほとんどの児童が助かったのか。それは、日頃から防災計画の見直しを行っていたからである。

震災の2年前の学校評価において避難計画の検討をしている。避難マニュアルで、津波の危険がある場合は宇津野高台へ二次避難を行うようになっていた。

また、隣接する戸倉保育所では「戸倉小学校屋上」となっていた。その後の見直しで消防署からも屋上への避難で安全が確保できると意見が出た。宇津野高台までは国道を横切り距離があるため、最短で3分で津波が到達することも予想されていることもあった。

しかし、地元出身の教職員から「地震が来たら津波。津波の時は高台へ」という昔からの言い伝えを変えるべきではないという主張があり、宇津野高台を避難場所とした。その後も議論がなされ、その時々で、屋上か、高台かは校長が判断することになり、逃げるときには必ず「手回し発電機付きのラジオ」を携帯することを決めた。

また、教務主任は教育計画の入ったUSBと児童の連絡先が記入された児童名簿を、養護教諭は救急セットと防寒具を持ち出すこと。

さらに、避難した経験から「津波の避難は何も持たない」という原則を「冬の避難には防寒着」という内容にすることで意思統一をしていた。

このように、毎年計画を見直すことで避難場所をより良い場所にしようと考えを深めることができたと思われる。

そして、教員それぞれの役割分担を明確にしていたことにより、それぞれの教員が役目を果たしたことが、特に人的被害が少なかった要因であると思われる。

また、地元出身の教員の「高台へ避難」という意見を採りいれていることから、教員一人一人が防災について高い意識をもち、主体的に関わっていたことが窺われる。これらのことがあったからこそ、生死を分ける一瞬の判断ができたのだと思われる。

6 宮城教育大学大学院

教育学研究科高度教職実践専攻院生との交流

(1) 研究内容についての交流

宮教大の院生の内訳は、小学校2名・中学校2名・高等学校1名で、研究テーマはそれぞれ「生徒指導」「組織マネジメント」「学年経営」「特別支援」「中学校技術科教育」であった。

「組織マネジメント」を研究中の教授との会話では、「ベテラン層の活性化と若年層の育成のために、探究の学習過程を取り入れたカリキュラム・マネジメントに取り組んでいる」ということだった。

30代後半から40代の教職員が少なく、20代と50代をどう生かすかが課題というのは、福岡の現場も同じだと感じた。

また、福教大大学院が「学校運営」と「生徒指導」に分かれているのは、「大学院での学びが何を指すのか分かりやすくてよい」というありがたい御意見もいただいた。

「学び続ける仲間」として大変有意義な時間であった。今後ともこの御縁を大切にしたいと思う。

(2) 防災教育についての交流

宮教大では、教員のための「震災遺構（荒浜小学校）を通じた『いのち』と『くらし』の学びの手引き」を作成していた。中には活用プランが3例掲載されており、「震災を風化させず未来にいかす」という仙台市教育委員会との連携が図られた素晴らしい成果であった。今後現場での活用を経て、さらにより手引きに仕上がっていくだろうと思った。

7 聞き書き（抜粋）

「たくましく生きよ、共に生きよ

—学校教育と教師を語る—

仙台市立錦ヶ丘中学校長 佐藤淳一氏

（元石巻市立雄勝中学校長）

（院生）佐藤先生は、今年も何本か講演に行かれたのですか。

（佐藤）今年も、新人校長研修や管理職研修はできるだけ行こうとは思っていて……。実は私が宮城県で校長になったとき一番年下だったんですよ。だから、あの時に校長だった最後の校長なんです。被災した時に校長をやっていた人で、私より年下の校長はいないので。私が来年リタイアすると、誰もあの時陣頭指揮を執った現場の校長としての現役がいなくなるんですね。だから、そういう意味でもせめて管理職の方々だけには伝えていきたいと思っていて、管理職研修でオファーがくるとそれだけは受けようかなと、今後、御殿場とか和歌山と

か話に行きます。

講演活動は、最初、校長になって（現場に）戻ったら止めようと思っていたんです。雄勝の校長を辞めた時に、だいたい1万人ぐらいに何とか語り継げればいかなと思っていたんですけど、実はこれまで全国各地で150回近い講演をしていて、3万人ぐらいになっていて、本でも1万人ぐらいは読んでくれていて、今は5万人を目指そうかなと思っています。別に数には拘る必要ないんですけど。やっぱり何年たっても伝えなきゃいけないという思いがあって。できる限り講演依頼は受けようかなと思っています。

講演をすると、やっぱり、現場の教員の話をはじめて聞いたという方々が結構多くて、他の人の話は聞くけど、被災地の話とか、その現場の真只中にいた、最悪の状況下にいた学校の校長の話は聞けないということを言ってくれた方がいて。やっぱり伝えていかなきゃならないなあって思います。

（院生）被災時には、最初に、生命の確認から始まって、どうにか食べられるようにすることが続いて、やっぱり今生きていくだけで精一杯だから、もういろんな事をやるのは無理だって思うところを、いろんな人が助けてくれる。そういう（何か始めようという）発想になったところが究極のマネジメントだと思います。

（佐藤）被災してしまったことはどうしようもない事実で、もう結果としてそれが事実としてあるんです。でも、だとしたら、これをただ単に子ども達にとってコンプレックスや、大変な思いだけの負の遺産として残したくないというのがあって、これは学びの一番のいい機会だと考えを転換するしかないという・・・。

子ども達にとっても助け合うとか、お互いに我慢とか、生命尊重だとか、自然への畏敬だとかも含めて、そんな形でこれが子ども達のエネルギーに変わっていったらという思いがありましたね。他の学校は、結構「元に戻したい」という思いが強かったようです。私は「元に戻す」とかじゃなくて「絶対、転んでもただじゃ起きない」という思いがあって、こんな大変な思いを子ども達はしたんだからそれ以上に越えてやるっていう、もっとプラスアルファで。そのためにやるのが教育じゃないかっていう・・・。

実は全員が無事だったっていう日、私一人間借りの職員室にいて、（午後）7時6分に全員が無事だった事がわかって。本当にガッツポーズして嬉しくて、嬉しくて、「全員が生きていた！」って。喜んで、喜んで、8日ぶりにやっと眠れるなあと思

うんですけど、喜びと興奮とで眠れないんですね。そして、ある瞬間から、今度は奈落に落とされるんです・・・。「じゃあ、これからどうする？」

子ども達は全員生きていた。でも全員の家が流された。親を亡くしている。職員も家を流された。亡くなった職員もいる。学校はない。地域もない。そんな中で、どうするんだ。学校教育ごときに何ができる・・・。

これで押しつぶされそうになって、一人また悶々と夜を過ごすんです。でも、地域の方にそれをお知らせするために「七十何名全員無事」と貼り出すんですけど、窓に。（地域の方が）体育館からぞろぞろと未明に起きてきて、それを見て、拍手が起きたんです。そこから僕はもう覚悟ですね。やるしかない。できる、できないじゃない、やるしかない。学校が子ども達を全部預かる。親はもう明日をどうするかをやらなきゃならないので、学校が全部預かってやる。でもその時、何の根拠もないんですよ。やるしかないんです。だからもうそれ以降突っ走っただけです。でもそれって多分先生方も全員持っている教師としての本質的なところ。私がこの話をすると、校長先生達も自分と置き換えて、自分ならできるかな、できないかなって考えるらしいんですよ、でもそうじゃないのです。「できる」「できない」じゃない。やるしかないから。

うちのスタッフだって自分のことは二の次、三の次で、全部子ども達のためだけに動くわけですよ。教師魂に火が付くんですよ。ただ、校長としては、それをどう整理して、コントロールしながらどう引っ張っていくか。でもまだ自分は新任校長だし、でもそんなことも全然言っていられるわけじゃないし、誰も経験してない未曾有の経験をしているわけです。

ただ、これを負の遺産として残したくない。子ども達にとってより成長できるものにしたい。先生達にとっても、危機管理だったり、生徒理解だったり、心のケアだったりとか、スキルアップのチャンスとすべきと。本の中にも書くんですが「雄勝の先生方は違うって思われるくらいやろう」と。これだけ大変な思いをしているなら、それだけの力付けようって、先生方も励ましながら。だから「大変だ」と思ったことがなくて、ある意味ですごく濃密な一年間だったんですよ。教師として一番やりがいのある、子ども達のためだけにやれるって。そして、こういう思いを話すと、やっぱり支えてくれる方がいるんですよ。本当に、ありがたかったですね。だからドイツまで行けたっていうのもあるし、東京ドームの演奏とか、ありえないような、あ

のときの被災した状況からここまでドラマティックに展開していくわけです。

私の講演でよく「防災教育」を期待しておられる方がいるようなんですが、そうではなくて、どちらかというと「学校教育の在り方」みたいな「本質」みたいな話なんです。

(入江) そうですね。「防災教育」だと準備していたことをどう展開したかという話になりますが、そうではなくて、次どう展開するか分からない中で最善解を求めていく。講演会場では、そこに校長先生達が共感して、涙を流していましたね。

(佐藤) 私が本を書いたときも別に泣く要素があるわけじゃないんだけど、泣いて読めないって言う人がいますし、講演の時も別に泣かせようと思って話しているわけじゃないけれど現実にはいます。

この子達のためなら何だってやろうと思っていました。支援してくれる人もいて、転勤が決まる前には署名活動も起こって。私は知らなかったんですが、全国から署名が集まったんですね。でもそれは結局届かなくて、現地の人は「坊主と校長は選べないんだ」って言って落胆して送ってくれましたけど。そういう方々の思いも大切に、自分の教師人生の中でぶれずにやっていきたいなっていうのはありますね。

ただこの4月に新設校に赴任した時に、この雄勝の話を子ども達にしているのかなっていうのがありました。ずっと悩んでいて、でもちょっと防災意識も低いし、いろんな事が起きるので、命の大切さも含めて、7月5日のちょうど開校して3ヶ月目にあたる日に講話をしたんです。80分間。そして、子ども達はやっぱり受け止めてくれましたね。うーん。嬉しかったですね。一気に校長と距離が縮まって。実は今147回目なんですけど、ある学校に講話に行ったとき「校長先生、もう百戦錬磨で慣れ慣れだから全然いいでしょ。」って言われたんですがそんなことなく、あの日まで自分を戻すので、話す前はナーバスになって、命に関わったいろんな人の事を話すので、思いをのせて話すためには・・・朝からナーバスになって終わるとぐてんとなるんですよ。でも自分の学校の生徒に話すとなると今度はもっと神経を使いました。言葉を選びながら。最後は、「この学校を日本一の学校にしようよ」って話したんですけど、盛り上がってくれて・・・。新たな学校づくりをなんとかねえ。でもうちは若い先生が多くて、面白い。

校長として8年ぶりに現場復帰して、実は仙台の現場には12年ぶりに戻るんですよ。そしたらやっぱりこんなにも先生達が忙しくなって・・・って

うのが分かるんです。肌で。そんな自分だからこそやれることがあるんだろうと思って、今ずっと試行錯誤していて、職員にも、働き方改革でも大胆なことやらなきゃダメだっていう話をされていて、何がやれるかって今ずっと思っていて。でも若手が多くて頼もしいんですよ。そして、先生方がみんなとおしくてたまらないんです。みんなとおしい。生徒がまたいとおしいんですけど、雄勝の時も生徒がいとおしくて、生徒のためなら何だってやってやるぞって、多分先生方がそれにあおられて大変だったと思うんですけど、今は先生方がいとおしいんです。頑張っている先生方が、ほんとに嬉しくて、あと2年しかないの、様々な事を伝えたいなあと思っているんです。

そういった意味で、こういう感情って面白いなと思っていて。校長として自分の部下の先生がいとおしいですよ。みんな一人一人が輝いていて、もちろんね、直さなきゃならないところもいっぱい見えてくるんですけど。いいぞ、いいぞ。いけ、いけって感じ。生徒を肯定的に見ることが生徒の自己肯定感を育てるっていうんですけど、私は先生達をまず肯定的に見ていこうと思っていて、若い人たちはいいものいっぱいもっていますから。その良さを見いだす目を逆にもっと上の者がもっているかどうかです。いいところをどう見つけていくか、一つでもいいんです。何か指導案を書いたりすると、どうしてもマイナス面を見るじゃないですか。でもどこを褒めるかっていうのは逆に分かってないと褒められないですよ。その力量をミドルリーダーや上の人たちがもっていて若手をどう見るかっていう・・・否定から始まったら絶対ダメなんです。

(院生) 震災から8年経ちますが、卒業生のことがまだまだ心配だというお気持ちですか。

(佐藤) もう全員二十歳を越えたので、会うことはないのですが、でもダメですね。私今でも全員の顔写真を手帳に貼ってますから。ストーカーみたいって言われるんですけど、でもやっぱり思いがありますね。

今は、今の学校に全力を注ごうと思っています。でもそれはそれとして、やっぱりあの子達への思いって特別なものがあるね。

(院生) 子どもが家族を失ったら何をしてやればいいのかわかりませんね。

(院生) 子どもが無事ってわかってても、(学校に)来れる子と来れない子とがいますしね。

(佐藤) 本当に大変な状況下で、やっぱり子ども達にとって、親にとってもだけど、学校は拠り所なん

ですよ。何にも無くなって、学校は間借りだけどそれでも学校に行けば、友だちに会える。先生に会える。だから、あのとき母親を亡くした女の子が、20歳になったときに「声を出して笑えたのは学校だけだった。」って言ったんですよね。家に帰ればもちろん母親を亡くして、あれはどうするこれはどうするって感じじゃないですか。だから声を出して笑えたのは学校だけって。それってなんか究極の話で、どんな大変な事があっても学校に行けば何か楽しいことがあったり、心が安らいだりできるっていう、そんな学校が創ればいいんだろうなっていう。

いやほんと、親を亡くした子が泣かないんですよ。学校で涙一つ見せずに部活を頑張り……。わたしはその子が涙を流さない分泣いていましたよ、一人、校長室で。何であの子は……って思うだけで泣けて、あとは一人で5時間運転する中で泣いていましたね。

そしたら、その子が20歳過ぎて全国放送のドキュメンタリーⁱⁱの中で言うんですよね。「私はあの時心を閉ざしていた」って。「自分の心を出せなかった」って。今も、あの子達が被災後40日経った時にはじめて書いた全員の作文を持っているんですよ。それをNHKがキャッチして、この作文でドキュメンタリー作りたいって、あの一年間の。全国放送で。それが去年の暮れに放送されたんですけど、その(作文の)中で、普通の子は結構大変な思いを書くんですね、でもその子は、これから部活をやって何何してって、簡単に書くんですよ。「私はその時に、お母さんが亡くなって見つからないって書けなかった」って、20歳過ぎて初めて言うんですよ。そして「実は、人前では泣かなかったけど、4歳の兄弟を母親代わりで育てながら、後ろ手にドアを閉めて、誰にも開けられないようにして、しゃがんで座って泣いてた」って言うわけですよ。私はそれがもう耐えられなくて。全国放送でその話私初めて聞いて、それがもうたまらなかったですね。だから、こうやって被災地をみんなで歩くと『被災地みんな笑顔だ』って言うんですけど、いや、よっぽどのものを背負っているんだってことですよ。1万8千430人亡くなられた方がいるんですけど、一人一人に人生があって家族がいて友人がいて恋人がいて、その1万8千430人の何倍もの人がどれだけの思いを背負っているかっていう……。

(院生) 昨日聞いた、それこそ(閉上の)丹野さんもですね。楽しく、冗談交えて話をして頂きましたけど……

(佐藤) そうそうそう。だって彼女も家族が亡くなっているんですよね。

(院生) はい。息子さんが。

(佐藤) うん。だから、実は伝えなきゃいけないっていう使命感とか、いろんな思いがあって話しているんですよ。やっぱり、うん、そうなんですよ。だから、話す事ってほんとにはすごく辛いんですよ。そこまで戻んなきゃならないんで。でも、伝えなきゃならないっていう思いで……。

(入江) (丹野さんは) すぐ近くに息子さんがいたにもかかわらず、ちょっと目を離した隙に離ればなれになって流されてしまった。あの時自分がもうちょっと気を付けておけば助かったかもしれないっていう……悔いというか、思いがですね。それがあの方を動かしているのかなと……。

(佐藤) そういう方の話を生で聞けてよかったですね。

(院生) 丹野さん、(石碑を)触られる時、もうほんとに子どもを撫でるように触られるんですよ。もうそれを見た時にたまらなかったですね。「触ってください。」って。「この子の生きた証をどうにか残したい。」って。写真も何もないって……。

(佐藤) そういう方がほんとにものすごい数いて、これからどうやって、みんな、それを少しでも汲み取ったり共感してあげたりっていう思いを伝えられるのは、教育しかないと思うんですよね。こうやって来て頂いて、その思いをどこかに伝えて頂いて、次の時代を生きていく子ども達に。教育しかない。だからさっき言った通り、マイナスの経験をプラスにしていって……それって教育しかないと思っているし、元に戻すだけだったら別に普通にいいけど、さらにその子達の人生にプラスになっていくようにやっていくんだったら、やっぱりそれはちゃんと意図的な教育をしっかり仕組んでやっていくしかないよね。だから、「やるしかない」っていう、そんな感じ。だから面白いんだ、教育ってね。やれるんだから。

私は、(生徒)全員が助かって、その時に「学校教育ごときに何ができる」って落ち込むんですよ。でも1年間やった後は、「学校教育の可能性ってすごいな」って。「やれる」って。あの最悪の状況から子ども達をここまでもっていける力が学校教育にはあるんだって。だって我々は、生徒があつての教師だから、教師があつての生徒じゃないから、大変な生徒がいるから我々がいるわけで、自分一人で成長していくような立派な生徒ばかりなら我々はいらないわけで、大変な生徒がいるから我々がいるわけで、大変な子どもがいるほど我々の必要

度が上がるはずなんです。学校に関われる喜びってというのは。子どもに関われる喜び。多分どこかに埋没している教師の本性みたいなのが、やっぱりあるんですよ。そこに火を付けるっていうか、そういうのかなあって思っています。

さっきの若手教員もそうですけど、みんななんのかんの言っても教師になりたくてなっているわけだから、ただ上手いかなとか、知識や体験が乏しいとか。そこになんのエキスをつぎ込んだら、ある程度おだててっていうのもあって、よいしょよいしょ前に進む。私はこういう方法でやっていく。校長研修で色々話すんだけど、校長はオリジナルティだから。雄勝が終わって管理職研修なんかで教育センターで話していた時とは別で、今は一校長に戻っているの、おこがましく言うっていうのではなくて「校長ってオリジナルティでしょ」って。もっともっとライバル心をもって、「おれの学校は最高の学校にするよ」って思えばいいんじゃないのかなって思っています。だから今は、横並びじゃない、仙台市の学校教育も、校長先生が市教委の受け皿なんかじゃない「もっとこれやりたい」という学校にしたいなあと。できるかどうかかわかんないんですけど。もっとシンプルでいいですよ。ちょっと今ごちゃごちゃしすぎている……。私がやれたのは、震災で全部なくなってしまったから。ゼロからやっていこうっていう発想になるわけですよ。だからやれた。

でも、ただ、よく言うじゃないですか「あそこだからできた」とかなんとか……。違うんですよ。実際は、その校長先生を含め先生達もやっているんですよ、ちゃんと。ところが「あそこだからできた」で終わっちゃうじゃないですか、違う。

(院生) 確かに、学校が一丸となってやっているのか、担任だけでやっているのかは大きく違うと思います。学校全体でやるっていう意識のある学校の子ども達と、担任だけでやっている学校とは、子ども達の成長が子ども達の姿に現れるなあって思います。今だからこそ、学校みんなでやるって大事だし、自分の限界がわかるって大事だと思います。

(院生) さっき先生が言われたように、やっぱりその先生の強みというか、そこをどれだけ入れるかというのが、ものすごく大事ななっているのが、ものすごく思いますね。ついつい足りない所っていうか、もっとこうやってくれたらいいのに……。っていうところに目がいってしまうじゃないですか。子どもとか見ていたらまさにそれで「もっとこうした方がいい」と思うけど、できている部分っていっぱいあって、そこを価値づけてあげるっていう

か、やっていることを修正というか、そっちに繋いでやるっていうか。

(院生) いいとこ伸ばせば、(マイナス面は) 自然と見えなくなっていくよね。

(院生) 先生が“こういう所が繋がっているね”って見せてあげれば、こっちに行こうとしていた所が、別の方に育っていくんじゃないかなっていうのはありますね。

(佐藤) 私は、被災した後に2本の柱を立てる、学校経営案に。「自信と誇りを取り戻す復興太鼓」それと「学力保障」。これは絶対外しちゃいけないというので「たく塾」というのをやるんですよ。そこに林真理子さん達が支援してくれたんです。やっぱり学力は、我々の使命なんでね。だって学校の本質は学力ですよ。学力って言っても点数だけじゃないけど、でも、子ども達に本質的な力を付けるのが学校だろうって。その核はぶれない。絶対子ども達に学力を付けるってなった上での……。もちろん心の教育だっていっぱいあるよ。そこをどうバランスとっていくかになる。被災地だって同じ。

(院生) 被災した時。子どものケアや職員のケアを一生懸命先生が心配される。でも、ご自身はどういう状態だったのですか。

(佐藤) だからその、本にも出てきますけど、ずっと突っ走って……。温泉合宿っていうのをやるんですけど、その時に「先生たちの年休を俺にくれ」ってとんでもないことを言って、先生方がキョトンとしていたんですけど。2日ずつ、休ませたんです。交代で。「金曜日と月曜日休んだら、4連休だぞ」とか言って、無理矢理休ませる。「校長先生はどうするんですか」って言われた時に、「校長は倒れたとき休む。」って……。でも倒れちゃいけないんですよ。校長は、絶対に。

6月を過ぎた頃に、ろれつが回らなくなったんですよ。3月に被災して、4・5・6とって、言葉が……。やばいって自分で思いました。口が回らない。思考が停止してきて……。あの時が一番ピークかなあ。でも休まなかったですね。土日休めば、まあ何とかなるかなって……。その前は、土日は営業活動していて、靴もって、教頭先生に「営業活動してくるぞ。」って言って、いろんな人と会ってたんですよ。会って「雄勝はこうです。」って、伝え歩いていました。

(入江) 校長が動けば、賛同してくれる人が多い。誰かに行ってこいじゃ……。無理ですね。

(院生) 支援を集めるって事ですか？

(佐藤) うん。そう。1番は給食ですよ。食べるものが無い。生徒に腹いっぱい食べさせたい一心でした。でも、人は繋がっていくんですね……。素

晴らしい。

(入江) そう。繋がりがすごいですねえ。

(佐藤) 人脈は、ほんとに・・・今でもありがたい。

(院生) なんで数珠つなぎにこんなに人が集まってくるかっていう。本を読む度に「また出てくる」って感じですよ。やっぱり誰かがどこかで気づくんですかね・・・。

(佐藤) そう。ほんとに嬉しいですね。立花さんって出てくるんですけど、住所を雄勝に移してやってくるのは「校長がいたからだ」って本に書くんですよ。

あと、亡くなって、がんになってまでも支援していただいた西島さんの奥さんと今でも会うと「主人は校長先生がいたから支援した」って言うんですよ。それってすごく重くて、逆に。命を落としてまでも支援して頂いて。でも「校長がいたから行ったんだ。」って。要するに「私」というより「校長」の「思い」は分かってもらえたって・・・。今でももう感謝しかない。ありがたかったですよ。

今日のあの(雄勝小中学校の)校長先生、私に対して「(佐藤)校長先生は人の心に火を点す」って言うてくれて。「ええっ」って。「そんな事ないから」って話していて、「私も雄勝中学校をまた支えています」って言うてくれて。

校長として、そんな力があるんだったら、若手教員に、寄与したいなあっていう思いはある。多分、誠実に、一生懸命「教師」という生き方をやってたら、若手も絶対火は付くと思う。

(院生) 知らず知らずに、その姿が・・・火を点すんでしょねえ・・・

(佐藤) そうありたいって言うか・・・だって教師って簡単で、夢と理想と本質を失ったら教師はやっていけません。絶対単純なんです。それしかないって思っていて。私なんか、世間から言えば「甘いな」とか「ゆるいな」って言われるかもしれないけど、夢と理想を教育は、離しちゃいけないし、やっぱりそこをしっかりとって子ども達、先生達にも。あとは、もう校長のフットワークですよ。多分、教育ってそんな難しい事じゃない。それをもってればいいんじゃないかな。へんにごちゃごちゃ考えなくていいんじゃないかな。本質は、私たち自身やリーダーが、ぶれないで、やったよ、やってきたよっていうのを示せばいいのかなって・・・。

(院生) もしあの日に生徒さんが一人でも亡くなっていたら、違っていたと思われませんか？

(佐藤) あの本の中で、ゼロか1(イチ)は違うって書くんですよ。亡くなった生徒はゼロだったんです。これが1でもあったら違うだろうって書いて

てんですけど、あの後、あれを書いた後ぐらいから、実は「そうじゃない」って自分でも思っているんです。1でも2でも私は前に進んだと。その子たちの分って言うか、背負うんじゃないくて、今生きてる子ども達をどう導くかなんで。それで急にブレーキがかっちゃいけないなと思っていたし、ただ多分ゼロだからやれた事がいっぱいある。いっぱいダッシュできたと思う。

(院生) 次に進むのも、動きが速いですよ。エネルギーに変えられた。

(佐藤) 輪太鼓も6月8日から始まっています。

福岡で講演をした時に、ある校長先生が私の所に来て、「私はあと8ヶ月で退職します。」「もっと早くに佐藤先生の講演を聴きたかった」って話されたんですよ。「校長先生、あと8ヶ月ありますよ。」って私は言いました。

あの時だって、まさか8ヶ月後にドイツで公演してるなんて思いません。もちろん、環境が違う。日常をどうするかの方がはるかに、それはそれで大変だと思う。あれは、非日常の部分があるから。でもやっぱり、雄勝だからできたんじゃないと思う。教職員がみんなでやれたからですね。

さっきの「ゼロか1か」が、もしかして「1か2」があったとしても、私はその子達を背負ってやるね。やりたかったね。さっき言ったように、あの子達にとって、絶対貴重な体験にしたかったんですよ。大変なマイナスのどうしようもない体験じゃなくて、これは貴重な体験をしたんだ。生きていく中で、絶対プラスだよっていう、そう出来るようにしたいっていう思いがあったので、うん。それってやり方は変わったかもしれないけど、私の気性だったら、そうなるって。その子も含めていくぞって。

私は、教育って本来、アグレッシブで、クリエイティブで、ポジティブなもので、そうでなきゃいけないというのが私の信念なんです。だからこそ教師が輝いて、子どもが輝く。ところがいつも守勢なんです。親の思いとかいろいろあるけど。もっと前向きで、積極的で。だから面白いんじゃないですか。

もっと大きく構えて、教育って未来を創って、国を支えてるんですよ。これって1つの学校でも、1つの学級でも、1つのグループでも、私はずっと言っていると思う。絶対1つのコミュニティは教育が創っていく。だからこそ、まあ批判も大きいんだけど、教育がやっぱりやっていかないと。

被災地経験は、ベースの部分なので、人と生き方とか考え方とか・・・。日本という災害リスクが世界で一番高い国で生きていくっていうのはどういうことだとかね。そういう生き方に関わるところ

の根源があるので、やっぱりそれは被災地を見て頂いて、それはどこかでベースに構えて頂いて、「だからこうだよ」って、どこかで言って頂いたら私は嬉しい。

私なんかまさしく、(被災して)学校教育が子ども達にとってものすごく大切なものだって、確信するわけですよ。あんな状況下でもやれたんですよ。学校教育の力ってすごく強くて、それをみんながどこかでもっていて、人と人が生きていくって事は、そういう困難な状況にあっても、支え合っていくこととか……。そういう本質的なことを、自分がもっている教育観の中にちょっと付け加えてもらえればいいなと……。

(院生) 佐藤先生、あの復興太鼓ですが、和太鼓がもともとあったんですか。

(佐藤) そうです。あったんです。被災して温泉合宿っていうのに、無理して連れて行くんですよ、子ども達を。ふかふかの布団で寝かしたいっていうのと、温泉につからせたいっていう思いで。

その5月の、温泉合宿で、「太鼓やんないか」って。「最初は段ボール叩いてもいいし、木を叩いてもいいし、みんなでやんないか」って……。そして偶然ホテルの人が「校長先生、タイヤで練習できる」って。これもまた奇跡なんですよ。よし、これでできるって。そして私が試作品を校長室で作るんです。それがあそこに繋がっていくんです。それを全員で作って。台も私がDIYで作ったのを事務員さんに「これ60台作って」って言って作ってもらって。

(院生) バチも麵棒を買ってこられてね。

(佐藤) あれも教頭先生が「麵棒でいいんじゃないですか」って言って、脇のカンカンは、私有家から竹を切ってきて巻き付けて、60台全部並べて「ドンッ」ってやったらすごかったんですよ。そこからですよ。もう震えて、「これはすごいものが生まれる」って直感しましたね。あの子達はそこに、自分の思いをぶつけていくんです。太鼓って得意な子もいれば、リズム感のない子もいるじゃないですか。でも全員はまっっていくんです。そしてその演奏が、「子ども達が頑張ってるんだから、私達も頑張ろう」って聴いた方々が涙を流される。すると子ども達が「自分たちも何かできるんだ」って思い始めるんですね。そして、それが東京駅で爆発するっていうか、すごい演奏をするわけですよ。それがドイツまで行って、ドイツからオファーがきて、「ドイツに来ないか」ってきて、東京駅の演奏もドラマがたくさんあるんですけど、ドラマが続くんですよ。ドラマティック過ぎるんです。でもそれは、あの子

達がかawaiiそうな演奏をしていたからじゃないんです。ひたむきに真っ直ぐに打つ太鼓の音って、やっぱり人の心を打つんです。

だから私が思ったのは、教育ってすごく可能性をもっていて。そこをすごく本気になってやる人がいると、すごい人が支えてくれる。ほんとにすごい人がいたんですよ。まあ著名人だからすごいって言うかわからないですけど。

例えば夏休みを1日中どう過ごすかっていうと、昼飯をどうするかですよ。無いんだから何も。そして林真理子さんが、自分がバーのマダムをやって、その収益を全部送ってくれたんです。黒木瞳さんもですよ。だからマネジメントって何かって時に、学校が誰かと信頼関係を作りながら、外へ開いていく行為だと。内なるマネジメントはいくらでもできるので。と私は思っていて……。でも、それは、学校がビジョンをもってるからですよ。さっきも話したけど。学校が適当だったら何も生まれません。ほんとに。

(院生) 僕は、大川小学校が衝撃でした。

(佐藤) 私はあそこに、全国全ての教員が立つべきだと思いますよ。

(院生) あの校舎見たら、もう何も……。

(佐藤) ねっ。それこそ自分だったらどうするかって置き換えますよ。それを聞いただけで嬉しい。あそこは見なきゃいけない。教員だったら見るべき。当日の対応についてどっちがいいかわかんないですよ。でも少なくともあそこで命が、74人亡くなって、教員も十何人か亡くなって。あれを無駄にしちゃいけないんです。少なくとも我々は。

(院生) ほんとあの場に立つことは、価値がありますよね。

(佐藤) そうそうそう。命を預かる我々、教育者ってどうなの？ということですよ。

(院生) 福岡ではもう新聞やマスコミ側の意見しか聞けないままで……。あの場に立って、じゃあ自分はもうどうって考えた時に、考えさせられる。

(佐藤) 今日……いや今回の視察はあそこですから。あそこに立つって事です。教育者があそこに立つって事です。それがどうなのかって。そこは自問自答と、自分の教師観と、これからどうしていくんだっていう、ここで一回突き合わせてほしいな。そこでしょ。一番は。

(院生) ではそろそろ院生から感想とお礼の言葉を申し上げます。

(院生) 佐藤先生今日は半日ありがとうございました。いつから佐藤先生に御一緒にいただいたかなって考えると、今日のお昼からなんですね。で

もその半日の間にも、すごく中身の濃い勉強をさせて頂いたなと思っています。防潮壁を実際に見て「大きな津波が来たから防潮壁を造っているんだな」と思ったところに、佐藤先生が「きれいな海が見えないじゃないか」と言われ、「ああそうか。地元の人からすると、海は怖いものだと思いたくないというか、これまで親しんできた長い歴史とかも大事にしたいという思いもあるなあ」と思いました。大川小学校の跡にも連れて行って頂いて、涙が出ました。子どもの写真があったんですね。あの子達が一瞬で亡くなったんだと思うと、胸がいっぱいになりました。テレビを視聴しても考えられますけど、やはり現場で佐藤先生から教えて頂いたことで、実際の方々の思いも聞きながら学ぶことができたなと思っています。また明日もよろしくをお願いします。

(2019年8月21日石巻市内にて)

8 映像(動画)資料の制作・配付

「東日本大震災被災地視察研修報告(13分)」を視察研修報告書とセットで関係者に配付した。

9 おわりに

現地に立ち、現地の皆様方のお話を直接聞き、場の空気を肌で感じることで、メディアや書籍では知ることのできない被災者や地域の思い、被害や復興の状況、あの日何が起こき、この8年間どんな困難があったかなど、沢山のことを感じ取ることができたかけがえのない経験になった。

平成23年3月11日の東日本大震災発生当時、毎日のように報道されていた被害や復興の情報も、次第にメディア報道が減少していくことで、私たちには被災地が現在どのような状況になっているのか、復興がどれほど進んでいるのか、限定的な知識しか得ることができなくなっていた。そのような中、今回、視察研修の機会を頂き現地を直接見て回ることで、今まで想像することさえできなかった被災者の思いや地域の願い、当日の様子、復興の軌跡に触れることができた。

特に、御子息を亡くされた閑上中学校遺族会代表の丹野祐子氏のお話から「息子がこの世に生きた証も全て流されてしまった。息子が生きた証を残したい。息子の死を無駄にしたくない。」という思いを強く感じる事ができた。

また、佐藤淳一氏のお話からは、「あんなにつらい思いをした生徒たちに、元に戻る以上のことを

やらないとだめだ。」という生徒の心に火を点すために何でもやるという強い思いと「地域を愛し、地域に誇りをもってもらいたい。」という未来に向かう思いを感じることができた。

東日本大震災後、8年間の間に熊本地震、九州北部豪雨、西日本豪雨、そして今年も佐賀県で大規模な水害など、私たちの身近な所でも多くの自然災害が起きている。その度に関心が高まるが、時間と共に日常の生活に追われ、支援や復興への思いが薄れてきているように感じる。

被災地の視察では、甚大な被害を受けた大川小学校跡、南三陸町、閑上地区などを訪問し、現在でも生々しく残る被害の爪痕を見ることができた。私たちにとっては、もう8年という思いも、被災地の皆様には、それぞれの思いが詰まった8年だったことを実感できた。

また、被災地で出会った人たち全員から伝わってきたことが、「来てくれてありがとう。」という思いだった。時間が経ち、薄れてきているあの日の記憶や、どのようにして立ち上がり、復興してきたのか忘れずに足を運んできてくれたことに対する感謝の気持ちを強く感じる事ができた。

私たちは教育者として、「地域を愛し、地域を守り、地域に誇りをもった子どもを地域と共に育てていく」という使命を今回の東日本大震災被災地視察研修で強く感じる事ができた。日常の教育活動の中で行う防災意識を高める取組、未来に向かって力強く歩いていく逞しさ、そして、かけがえのない命を守り、繋いでいくことの尊さを、それぞれの立場で少しでも還元していく覚悟をもつことができた今回の視察研修であった。

参考文献

- 仙台市教育委員会 2019年4月 「仙台版防災教育実践ガイド」
石巻市 2017年3月 「東日本大震災 石巻市のあゆみ」
佐藤淳一 2012年6月10日 「たくましく生きよ 響け!復興輪太鼓石巻・雄勝中の387日」ワニ・プラス
佐藤淳一 2015年2月15日 「奇跡の中学校 3.11を生きるエネルギーに変えた生徒と先生の物語」ワニ・プラス